

狩人狩り

長須くん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分の家族が獣に襲われた夜に助けしてくれた二人組の狩人、ヘンリックとガスコインに弟子入りする若者がいた。

若者の肌の色はヘンリックと似ている所為か、打ち解けるのも早かった。

だが、保守的なヤーナムにおいて抑圧された長年蓄積されたヘンリックの思いは、相手に理解されたいあまり少々踏み込みすぎ、一線を越えてしまうかもしれぬという事態となる…。

目次

予兆	1
師弟	11
確信	14
本懷	19

予兆

お前は解っていないなとその目は笑っていた。

ここはヤーナムだ、とも。

狩人に志願した理由は、あの人の役に立ちたいと思つたからだ。

幸い、稼業が鍛冶屋だったので武器の扱いには慣れていたのも弟子入りを許された理由だろう。

ヤーナムに祖父の代から移り住み、武器工房を立ち上げ、故郷で産出される希少鋼を加工した一部好事家向けの武器も作っていた。

研ぐと刃の面に特徴のある細かい輪文様が浮き出る特殊な鋼で、高値で取引されていた。

この特殊鋼は大変に硬く、加工するのに技術を要する。その高い技術を買われて狩人たちの間ではそこそこの名のある鍛冶職人の一家として認められていた。

だが、街中に於ける獣の出現が恒常的になりつつあったある晩。

灯りと油脂の匂いに引き寄せられた獣に運悪く入り込まれ、周辺をも巻き込むような

騒ぎになったとき、懇意にしていた狩人たちが急いで助けに来てくれた。

黒い狩人たちの中でひとときわ目立つ黄色の装束。

それに追従するように大柄な神父があつという間に獣達をなぎ倒してくれた。

しかし。

一家はことごとく獣の毒牙に掛かり無残に命を散らされた。

自分だけを遺して。

捨てる神あれば拾う神ありという言葉もあるとおり、近年増殖の傾向にある獣に対応する為、狩人たちは後続の若手を育成する方針に力を入れていた事が幸いし、自分もその枠に入る事を決めたのだ。

そして、入るならあの黄色い装束の狩人と神父の下が良いと切に願った。

一番に乗り込んで獣と戦ってくれた恩人だからだ。

今ではやっと先輩たちの後を追えるようになり、後方支援や下っ端のザコを掃除したりしていた。

まあ、ザコとは言っても気を抜けば死に直結する程には強い相手、決して楽なものではないのだが。

先輩狩人の名はヘンリックとガスコイン。

流石、ベテラン達の仕事は本当に惚れ惚れとするもので、特にこの2人は息が合つて

ヤーナム随一と言われる程に安定の狩率を誇っていた。

的確な射撃で怯ませた次の瞬間には、ノコギリ鉋が撫でるように獣の喉笛を搔つ切り、かたや神父は戦斧を威嚇するかのように鳴らしたかと思えば巨大なマサカリに変形させ、容赦なく獣どもの脳味噌を叩き潰して行った。

声を掛け合うでもなく一つの仕事を終えるそのつど、流れるような所作でお互いが背中合わせとなり次の獲物を屠る距離を測っている。

自分も見とれてしまいそうになるが、一瞬の間は命取りと言う事を慌てて思い出し、目の隅で先輩たちの仕事の進み具合を確認しているのだと自分に言い訳をして、その勇姿を盗み見ているのだ。

ヘンリックは厳しいが年齢の所為か、鷹揚な面がある。

一見、人を寄せ付けぬ神経質な雰囲気醸しているが、それは長年のさまざまな経験に基づき辿り着いた表向きの処世術だろう。

実際はそうでない事は、彼を慕う人間が多い事からもうかがい知れる。

自分はこの狩人が本当に憧れであつたし、人間的にもとても尊敬している。

父親や兄のような年上の理解者という安心感もあつた。

もう一人、ヘンリックの相棒であるガスコイン神父も豪放磊落な人柄であるが、意外なことに繊細な面も持ち合わせている。

それは彼に愛すべき家族がいるからだと思うと、なんだかこそばゆくなくなるほどに好感が持てた。

つまるところ、自分はこの二人の下で師弟関係を結ぶことができ、心底良かったと思っている。

実は、ヘンリックも自分の事を殊更に気に掛けてくれているのを薄々知っていた。

なぜなら自分の肌の色はヘンリックのそれと似て、太陽が常に照りつける処に住まう人の色だったからだ。

同郷でないにしても、自分にいくらか似ている他人には親しみが湧き、また自然と引き合うのも無理はない。

相棒を心底信頼し、常に最優先に考えるガスコインをして

「お前の肌の色はヘンリックによく似てる。だから何と言うわけじゃないだろうが、似ている者が居るのは少しは慰めになるのかもな」と言わしめた。

それは自分もそうだった。

ヤーナムの街に自分に似た肌の色の人間は、ヘンリックを除いて皆無だった。

保守的な人々は外見の違いを正義の盾として異端者を排除していく。

それは本能的な行動ではあるが、原始的かつ稚拙で退行的な行いであった。

斯様に少数派には生き難い環境の中において同胞の存在というのは、たとえ、誰にも頼らずに生きていける強さが有ったとしても、誰か近くに居るに越した事は無い。

共通の事で寄り添える、というのは生きる上で希望だから。

——だが希に、長年心の中に押し込められた、自分でも気が付かない鬱屈した感情に触れて欲しくて、相手の領分について性急に踏み込んでしまう事もあったようだ。

ある日の午後。その日は珍しく晴れていた。

工房で片付けをしながら、夜に行われるであろう狩の準備をしていた。

武器の調整、水銀弾、輸血液、油壺、火炎瓶などの消耗品の補充、品質をチェックし不備を直し、数を数える。

外が明るすぎて室内の暗さが際立っていた。

戦いの前の静寂といったところか。こんな風景は嫌いではない。

嵌め殺してある窓から差し込む光で全てが逆光となり、普段見慣れているものが黒々とシルエツトとなり不思議な雰囲気を出していた。

ふわ、と髪が揺れた気がした。風？

気のせいかと手で撫でつけ振り向くと、そこにはいつの間にかヘンリックが音も無く立っており、真昼の幽霊のような違和感にいささかギョツとさせられた。

ヘンリックの手が途中まで伸ばされていて、彼が髪に触れたのだと判った。

光の加減の所為か恐い顔をしていた。

どうしたんですか、と訊くよりはやく、それこそ唐突にヘンリックは尋ねた。

「お前は…飢えることはないのか？」

飢える、とは？

質問の意味がよく解らず目をくるくるさせ、急いで答えようとしたが口は明確な言葉を発することが出来ず、しどろもどろになってしまった。

「ア…あの、すみません。質問の意味が…俺にはよく…」

なおもじつと答えを待つように相手の瞳はこちらを見たまま動かない。

見ようによつては夏の宵のような紫がかつた瞳の色がまばたきもせず若い狩人を凝視していた。

その目に耐えられず、また、本当にどう答えたら良いか解らず途方にくれていると、すつと顔が近づき視線が合ったまま前置きも無く唇が重なった。

反射的にヘンリックから逃れ唇を庇った。

何をするのだと抗議の目を向けると古狩人はそのままこちらに二歩三歩と踏み出し、若い狩人はいきおい後退せざるを得ず、背後の安全を確認する間もなく、壁際に追い詰められた。

何かが当たって床に落ちガチャンと音を立てた。

わが身に起こらんとする危険を察した時には再び唇をふさがれていた。

ひんやりと薄暗い工房の中、さんさんと光降る窓際を背景に二人のシルエツトがひと処で溶け合い、小さく湿った音が聞こえた。

何が起こっているのか把握できるほど冷静さを取り戻せぬまま、必死にヘンリックの胸元を叩き、押し戻し抵抗しようとしたがこうした事には慣れているのか、最低限の箇所を押さえられて動く事さえ出来なかつた。

うう、と唸り抵抗を続けるも何故か印象的だったのは唇の柔らかさだった。

自分を含め、男の唇など薄くて硬いものと思っていたのだが、女のはまた違うしなやかな柔らかさで意外に思った。

また、こんな状況でそんな小さな事に気が付いてしまった己にも。

その唇の動きが痛みを伴うような、乱暴であったりぞんざいなものなどでは無く、言葉にすると「慈しみ」が伝わるような口づけだった。

相手を想うような、大事にするような。

唇を離さず息を継ぎ、引きずる様に角度を変えて柔らかかに、そつとつえばむように若い狩人の唇を愛撫する。驚きのあまり固まったままの半開きの口にチロリと舌を紛れ込ませ、相手の様子を見ながら進もうか退こうか迷うようなしぐさをした。

それを感じ取り理解した途端、首筋にぞろりと恐ろしいほどの快感が走った。

戸惑いはまだ消す事が出来なかったが、まぶたが震え、首筋から背中に官能的な雫が垂れていくようにだんだんと下がっていく何かの感触に必死に抗っていた。

ともすれば何もかもを手放して流れに身を任せたくなるような、快樂の波濤を予感させた。

この：感触が腰の辺りまで落ちてしまつたら、大変な事になると直感警告を発し、必死に理性を喚起させ正気を保つた。

「ヘンリ：ヘンリツ：ク！やめてくだ：さい：!!」

この一言をやつとの思いで喉から絞り出したが、多分、顔は真っ赤で耳まで赤くなくていたはずだ。

赤くなるという事は羞恥を表しているが、嫌悪はしていないという事。

ヘンリツクのこの突然の行為を自分は最終的に肯定した事を教えたようなものであつた。

それを知つてか知らずか、

「驚かせて、すまなかつたな」

と何事も無かつたかのように身体を離し、今夜の狩りに遅れるなよと言ひ残して立ち去つた。

ヘンリツクの気配が、完全に居住の範囲から消え去ると、止まっていた時が流れ出し

たように、身じろぎもせず壁を支えに立っていた若い狩人は、腰が抜けへたり込んだ。

その夜、比較的大掛かりな獣狩りが行われ、自分のような見習いも頭数を揃える名目で集められた。

やる事は実質、後方支援なのだが、もちろん気は抜けない。

だが、そこで自分はヘマをやらかした。

階層になつている住居の屋根伝いに忍びこんで来た獣に気がつかず、倉庫代わりになっていた路地裏から水銀弾や輸血液を運び出そうとして、背後がガラ空きになった所を急襲されたのだ。

今でも耳に残っているのは、バケツの水を盛大にまき散らした時のような、派手で滑稽な音だった。

次の瞬間には地面に叩きつけられ、自分の血の海に突っ伏していた。

痛い……?と思つたら、猛烈な激痛が襲い掛かり獣の存在など意識から吹っ飛んだ。

声も上げられず息をすると血の混じった咳が出て、肺にも幾らか損傷を受けたのがわかった。

即座に死を覚悟した。

ヘンリック…!!

意識を放棄する直前に脳裏に浮かんだのは慕わしい彼の名前だった。

(つづく)

師弟

疼く痛みに目が覚めた。

重い瞼をうつすらとこじ開け、淡い燭台の光さえも眩しく感じる現世に若者は引き戻された。

寝台に寝かせられて居ることを理解し、鼻が嗅ぎ慣れた皮ワツクス匂いの匂いを捕まえる
と、直ぐにここが何処か判った。

無意識に目が姿を探す。

ヘンリック。ヘンリック、どこ。どこに居るんですか…。

少し頭を動かすと直ぐそばに組んだ足が見えた。

その上方に視線をずらすと無精ヒゲを生やした初老の男が、居眠りをしていた。

ヘンリック。

何故かすぐくホツとした。よかった。居た。

手は怪我をしていなかったの、ゆっくりと痛みを避けながら、大層な努力で初老の男の膝に触れた。

跳ねるように目を覚ました男は、一瞬の瞼のしばたきのち、がば、と自分に向き直つ

た。

そして視線を合わせると、静かに深く、これ以上無いと言うくらい深く息を吐いた。

「ガスコイン。」

相棒の名前を振り向かずと呼ぶと、隣の部屋から巨軀がぬつと顔を出し、おお、気がついたかと、緊張が解けた声で足早にやって来た。

「交代してくれ。湯を沸かす」

素つ気なく言うど怪我人に響かぬ様に静かに退席した。

代わりにガスコインが座ると顔を覗き込んで来た。

「ふむ、意識はハッキリしてそうだな。峠は越えた。よく頑張ったな」

返事の代わりにわずかに若者は笑ってみせた。

「後は輸血液と安静で治して行けば良い」

医療教会に所属していたこの神父のおかげで、的確な処置を施され一命を取り留めることができた。

「おまえ、三日三晩死んだ様に眠ってたんだぜ。」

身体はピクリとも動かず、心の臓だけが辛うじて生存を主張していたのだと言う。

ガスコインは背後を気にしながら声を落とすと、

「あのジジイな、お前を襲った獣を恐ろしい勢いでミンチにしてたぜ。いつもは急所

を手際よく撫で切つて可能な限り汚さないんだけどな、狂つたように潰してた」

俺が止めなかつたらずつと叩き潰していただろうよ、とも。

少し驚いた。可能な限り綺麗に始末するのは、何頭もの獣を相手する為の最良の体力温存法だと、当の本人から口酸っぱく言われて来たからだ。

「それでずつと付きつ切りでここに座つてお前を看病してたんだ。俺が代わるから少し休めと言つたんだが、あのクソジジイ、頑として言うこと聞きやしねえ」

と、ガスコインは可笑しそうに笑つた。

「ありや、お前の事を相当気に入ってるぜ」

(つづく)

.....

確信

身体の傷も癒え、また狩人の仕事を再開させた。

幸いにもこのところ獣達はおとなしくなりを潜めているようで、その間に狩人達は次にいつ来るか判らぬ獣狩りの日の為の準備に余念が無い。

身体を充分に休め、狩の腕を上げる訓練をし、消耗品を製造・補充し、武器の修理・開発に居住区はにぎわっていた。

夜は愉しみの時間も設けられるほどには余裕が持てた。

酒を飲み、肉を食い、束の間の人間らしい営みがそこにはあった。

そんな時は、ヘンリックもガスコインも懇意にしている者たちと食事を共にした。

羽目を外すことは無かったが、彼らなりに普段よりは格好を崩していた。

ある晩、音がして目が覚めた。

何かがかすかに軋む音。

重い物が一定の間を置きながら軋んでいる。

まだ夜半過ぎ、夜明けまで間がある。

今夜は天気が崩れてからだんだん雨脚が酷くなり、獣狩が早々に引き上げられた。

狩人が今いる部屋はヘンリックの工房で、金のない彼は居候をさせて貰っているのだった。

隣は主寝室、のはずだ。雨音に混じって時折声も聞こえる。

まさか狩人の家に物盗りも有るまいとは思ったが、念の為に忍び足で壁に耳を当て、音の正体を探った。

程なくして顔がカツと熱くなった。

あれはヘンリックの呻き声。

一体何を、と思うよりもさまざまな事を察した。

ああ、ガスコインと……。やはりそう言う事か、と。

何時もの無愛想な態度からは想像できないうわづった声、家具の軋みと共に聞こえてくるのは、なんだか冒瀆的な感じがした。

自分の憧れている人の喘ぐ艶めいた声を聞いて、男同士の罪深い行いを咎めるよりも、ついその顔を想像してしまう誘惑に負けた。

どんな悩ましい顔を相棒のガスコインに見せているのだろうと、後ろ暗い興味が後からあとから湧き出てくる。

唐突に、大怪我を負ったあの日の昼下がりに、工房でヘンリックに唇を奪われた時の事が喚起された。

なぜ彼自身がそうされたのか判らないまま、自分の気持ちをもてあましていた。

己の唇に指をやり、禁断へのときめきに思わず触れてしまったあの瞬間を、戸惑いながらも反芻する。

自分は男なのに男を求めそうになっている。

好きにされたいと思ってしまうている。暗い部屋の中で壁にもたれながら狩人は逡巡していた。

あのまま状況に任せていたらどうなっていただろう。

自分がまったく別の人間になってしまいそうで恐ろしかった。

知らない世界に溺れてしまいそうで恐ろしかった。

そんな自分を見てヘンリックが失望する事が、何より一番恐ろしかった。

ならばやはり今までどおり何も無かった顔をしてやり過ごすのが良いのだろう。

ヘンリックの知らないところで己の欲は発散させればよいだけの事。

こんな禍々しい思いを抱くなど身の程知らずというもの…。

ああ、それにしても思ったよりもしなやかな唇だった…。

もし…。もしも、その唇で身体を這われたりしたら。

ぞくぞくと官能的な期待に鳥肌を立たせて、身体が未知の興奮に震えた。

ヘンリックの身体の下で寝台を軋ませて自分が喘ぐ妄想…。

ヘンリックに：。

あつという間に体の中心に熱が集まり、たまらず手で己を掴むまではよかったが、慣れていないはずの行為が何故だか初めてのようになり、鼓動は早鐘のように胸を打った。

興奮に手が小刻みに震え、そつと動かしてみると熱い吐息に絡めて思わず声が漏れ出した。

自分の手がまるで別人の手の様な気さえしたほどで、壁に身体を預けると隣の部屋の音を聞きながら妄想を昂らせ好きなように喘いだ。

男の名前を小さく呼びつつ息を荒げては、熱を持つてそそり立つ自身をまるでその人が弄ぶ様に苛め抜き、叫んでしまいうる口になる口を嚙ませて自らを黙らせ、息苦しさに恍惚となり、そしてあつという間に白い放出に至った。

自分を慰めた事など健康な人間ならば当たり前前にあるが、この時ほど深い快感を得たことは無かった。

隣室の音はまだ続いている。

あの人の声がする。

条件反射のようにまた勃ち上がったそれを再び絞り上げる。

そうやって何度も登り詰めた。

ついには、ああ……と、精も根も尽き果て、おまけにひどい罪悪感にさいなまれながらぐったりと深い眠りに落ちていった。

雨はますます酷く降り続き、いまだ夜は明けていない。

(つづく)

本懐

その日の狩はヘンリックと組んで現場に赴いた。

自分もヘンリックと同様、誰でも扱える鋸鉋を使い連携の实地訓練も兼ねていた。

いつもはガスコインも居るのだが、この日は別の場所の担当となり、初めての師弟共闘というカタチとなった。

狩人志願から大怪我を経て、すでに新米狩人と言うにはトウがたつた中堅の狩人となり、準備も手順も頭で考えるより身体が先に動くようにはなってきた。

ヘンリックの視線一つで次に何を要求されているのかも解るようになってきた。

この日の討伐は14体。まずまずの仕上がりであった。

ヘンリックの家に戻ると武器の手入れと狩衣装の血を洗い落とす為に水に漬け置く。

湯を沸かし、自分達の身体を清めリネンの肌着を身に付ける。

一通りの作業を終えやつと一息つく。

ぼんやりとヘンリックが淹れてくれた蜂蜜入りの紅茶をすすりながら、窓の外を見ていた。

街はいくらか灯がともり、淡い暖かな光が連なっているさまは、まだ人がそこで生活

出来ている希望を感じさせた。

紅茶は無くなり掛け、蜂蜜が底のほうに溶け切れぬまま残ってしまったので、くるくとカップを回しながら溶かした。

これを飲み終えたらさっさと工房へ行ってしまうおう…。

いつものように神父がいる時は彼に任せてしまえば良かったのだが、今日のように一対一だと間が持たず、ヘンリックと顔を合わす事が憚られた。

僅かではあるがヘンリックが全てを知っているとは限らない、という希望的観測が、若者にはあつたのだが…。

「…ちよつと工房の作業が残っているのでいつてきま…」

「傷の具合はどうだ。まだ思うように振れないか？」

窓際から移動しようと足を踏み出した時、まさに、絶妙としか言いようの無いタイミングで声を掛けてきた。

「あ…いや、大丈夫です。引き攣れも無く…狩には問題ないかと…」

「そうか」

そ知らぬふりをしてヘンリックの横を通り過ぎようとしたとき、ふいに左手を掴まれた。

「何故俺を避ける」

—— やはり見逃してはくれなかつたか。狩人は祈るような気持ちで目を閉じた。

「避けて……ません」

「ハタクソな嘘つくくんじやない」

「避けてません！ヘンリックさんの思い過ごしですよ！」

と言つてから、ああ。やられた、感情を誘導された……と気が付いた。

これはもう強行突破してしまおう……。明日になればまた普通に一日が始まるだろうから、と言葉を待たず手を振りほどこうとした。

「顔、赤いぞ」

ドスツと、まるで弩の太矢のような重さのある物騒な音を立てて、ヘンリックの言葉が若者に突き刺さつた。

「そんなことないです」

「あの時もお前は顔を赤く染めていたのか？」

思わず振り向いた目はこれ以上無いほどに見開かれ、恐怖を貼り付けたような顔をしていた。

一瞬で分厚い盾が蒸発し、完全な丸腰になつた気がした。

いまだ、手を掴んだままのヘンリックはゆっくりと若者を振り向くと、何かを見透かしたかのようにこう言つた。

「お前はまだ解っていないな？ここはヤーンナムだぞ」

以前、生き永らえる為に、自分の欲に忠実になる事を選び、それまで信じていた神を捨てた神父の話を聞いた。

ここがヤーンナムであるがゆえにそれまでの価値観に縛られていると、この街では短命に終わると。

だから ——

「まさかとは思うが俺が知らないでも思っていたのか？」

射抜くような、夕闇の色をした目の古狩人が全能神の如く宣告した。

「俺たちがやってる隣の部屋で一人遊びをしていただろう」

ヘンリックの口が面白そうに歪んだ。

自分達のしていたことは隠そうともせずに。

カツと頬が熱くなり、乙女でもあるまいにと自分を叱咤したが動悸に視界がぐらぐらとゆがんだ。

聞かれてしまっていたのか。

あの狂おしい思いで自らを慰めていた夜。

『ヘンリック、ヘンリック』……って。切なそうな声だったなア……。ところで『ヘンリック』って誰だ？ん？何をしていたんだ？あそこで？」

—— ヘンリックって誰だ、とはまた酷い嬲り方だ —— 何も言えなかった。
顔をそむけうつつむくしかなかった。

古狩人は少し荒く腕を引つ張るとその勢いで彼の正面に若狩人を立たせた。

一番知られたくない人に自分の醜態を口にされ、あまりの絶望感に内臓がめちやくちやになりそうだった。

「暗がりで俺の声を聞きながらシたのか？ フフツ。もしかして昼間の工房の続きを妄想したのか？ ん？ 言ってみろ。イッたのか？」

辱めの鞭は容赦なく打ち据えられ、罪状を延々と聞かされる羽目になるとは思わなかった。

ヘンリックは立ち上がり、若者の周りを威圧するように歩き回ると一番無防備な位置で止まった。

「黙ってちや解らんな。…俺がどういふ態度でお前の前に立てばいいか知りたいのだよ」

この古狩人は時々難しい言い回しをする。

態度とは、どういう意味だろう。いや、自分はもう解っている。

だつて名前を呼んでしまったではないか。あの夜に。

呼び捨てで呼ぶような間柄を願つたではないか。

身体の交わりを望んでいたではないか。

つと、髪に何かが触れたような感覚があった。

知っている感覚だ。既視感、という言葉が浮かんだ。

昼下がりのひんやりと薄暗い工房の情景がぱあつと目の前に広がる錯覚に襲われた。

今度は間違いなくヘンリックの指が若者の濃い色の髪を吟味していた。

すっ…と耳の後ろに髪を掛けて梳く指が、若者の形のよい耳をあらわにしていく。

あの時と違うのは露骨に指が耳に触れ、そのたびに油断すると熱を持った吐息が出てしまいうようになることだ。

耳の縁が熱い。

たぶん鮮やかな紅い色に染まっていることだろう。

「工房で…俺が質問したのを覚えているか？」

背後からヘンリックが問うた。

「…はっ」

『お前は…：飢えることはないのか？』と訊いた。意味、解るか？

「…まだ…解らない…ままです…」

嘘をつけ。解っている。

解らない振りをしているだけだ。

髪を梳く手は止まらず、はらりと落ちる髪を拾いながらずつと触れていた。

「——そうか。俺は飢えている」

少し怒ったような声に申し訳なきを感じた次の瞬間、突然むき出しの右耳にささやかれた。

「…同じことをもう一度やったら解るか？」

ぞろりと音を立てて鳥肌が立ち、身体がざわつと悦んだ。

ああ、今度はもう止められる自信は無い。

狩人は観念して目を瞑った。

「解る…と思います…」

一呼吸置いて、ふわりと背後から腕を回されると身体を密着してきた。

鼻をクン、と鳴らす音がして耳の裏の匂いを嗅がれた。

相手を誘う匂いはここから出る。

無防備な背後を取られ、抑え気味の熱い吐息を聞かせられたら、どうかしない方がおかしい。

ぴたりと鼻と口を付けられ、ケモノのように匂いを嗅がれながら舌で味見されるといふ地獄の合わせ技で、早くも腰砕けになりそうだった。

あつ…と我知らず小さな声が漏れ、おぼつかない自らの手は何か掴まらねばと背後の

ヘンリックに支えを求めた。

それを、自分に全てを委ねたと判断したヘンリックは、若狩人の首に歯を立て強く咬み、吸い付いた。

甘い痛みに短い声を上げ、更に背後により強くしがみつく。

だがそれは、もつと、もつとと無意識に要求してるサインでもある。

抱きしめていた腕は解かれ、するりとリネンのシャツの中に滑り込み、滑らかな淡い褐色の肌を味わった。

ヘンリックの肌の色とそっくりな肌は、素晴らしい感度のようで、硬い爪で軽くなぞっただけで必死になって声を漏らすまいとする。

その肌の質感を楽しんでいるうちに胸元の突起に行き当たった。

コリツとした小さなふくらみは、ヘンリックがゆっくりその先端を押しつぶして更に硬さを促してやる。

すると、ついになぐんと若者の顔が反り、喘ぎなれない初々しい声がどうしてもとあったように、こぼれ出る。

「ハ……たまらない声だな。どうすればもつと聞かせてくれるのだ？」

「あの……あの……許して……下さい……どうか……」

震える声をやつとの思いで口から出したのに、結局、何を許して欲しいのか若い狩人

は自分でも解らなかつた。

「……まで来て、もう許すわけが……ないだろう?」

心臓を射抜くような低く優しい声だった。

ヘンリックは若狩人の足の間に己の右足を割り込ませ、強制的に脚を開かせた。

倒れないように左腕で支えながらも片方の手を素早く下穿きにくぐらせ、熱源を掴んだ。

途端に切ない叫び声と共に、腕の中で若者が身体をよじつた。

甘い鼻声をさせて善がっていた。

「ああ……ダメです、立って……られない……」

「俺に懇願する割に、……がこうなってるのは、どういう事か説明してもらおうか」
若さを体現するかのような屹立したそれは、既に用意万全だった。

「俺に問い詰められながら、……をおつ勃ててたのか。そんなに俺に欲情してるのか?……存外に好き者なんだな」

「ちつが……違い……ます……!ヘンリックさん……どうか……おねが……」

「あの夜みたいにしてやろうか。同じそのベッドで、俺の相棒にされてた事をそのままに。……お前は、そうして欲しかったのだろう?望みを叶えてやろうと言っている」

若者の逸物をヘンリックの五本指がしっかりと絡めとり、抗うことも逝くことも許さ

ず、さながら拘束具のようだった。

その先端からは、許しを請う涙のような体液がほとほと垂れ、ヘンリックの指も一緒に濡らしていた。

「…そういえば。誰か男の名前を呼んでいたようだったが。なんという名前だったかな…？ん？」

可哀想に、若い狩人の自尊心はズタズタにされ、大の大人だというのに、顔を真っ赤にして泣きそうな顔をしていた。

なおもヘンリックはいたぶり続ける。

「その男の名前は？なんというのだ？…んん??…聞こえないな…？どうした？」

「……」

「言え」

「…へ…ヘンリ…」

「聞こえないぞ」

「ヘンリック…！」

「ほう！ヘンリック！それは俺の名前かね？」

「……」

「お、れ、の、名前かね？」

「…そう…です…!」

「フツ…! いい子だ。…俺の名前を呼びながら自分のをシゴいていたんだな。このオス犬め…」

褒美とばかりに、首筋にキスを降らせながら、握った手の中のモノをゆるりとしごいてやる。

とたんに電流が流されたように狩人の身体が反応する。

ゼエゼエと苦しうに肩で息をするも、股間の逸物は悦びに打ち震えている。

「ああ…ああ…お前は本当に可愛いな…」

ヘンリックは愛弟子の痴態を見ると、思わずぞくぞくしながら呟いた。

そうして一番の弱点を戒め逃げられぬようにされながら、容赦なく耳元に注ぎ込まれる辱めの言葉は確実に理性を破壊して行き、欲望を露わにさせることに成功しつつあった。

ベッドになだれ込むと、ヘンリックは愛おしく想うこの若者にたまらず唇を重ねた。

舌は相手の口内に迷い無く侵入し、若く戸惑うそれに絡みつく。

唾液は混じり、蜂蜜の甘い味がした。

ヘンリックは若者の中を隅々までなぞった。

上顎のくぼみ、歯並びを確かめ、時折、唇を甘噛みしながらイタズラするように軽く

引つ張る。

動物がやつと手に入れた大好きなオモチャにするように、じつくりと調べつくしているかのようだ。

唇がお互いの熱いため息と共に僅かに離れた時、若い狩人は目を開けた。

アメジストのような謎めいた光を宿らせたヘンリックの瞳が、間近に見えた。

美しい瞳だった。

若い狩人は自分がどう振る舞えば良いのか全く判らず、手も中途半端な位置で浮いていた。

それに気が付いたヘンリックは、

「どうして良いかわからないのなら、俺の首にしがみ付いていろ」

恐る恐る相手の首に腕を巻きつけると、がら空きになった脇をヘンリックが抱きしめた。

—— ああ……!

がっちりと動けぬほどに身体を締められれば、思わず甘い吐息が出た。自分でもびびくりする位に色っぽい声だった。

「…そう不安がるな。されるままにしている。——俺が教えてやる」

首筋を下り、鎖骨をなぞり、胸元に辿り着く頃には若い狩人が願ったとおりになった。

柔らかくしなやかな唇が艶やかな肌の上を這い回り、舌が敏感なところを撫でていくのだ。

もう、周りを憚らず快感を素直に声に出した。

与えられる刺激を声で逃がさないとおかしくなりそうだった。

無我夢中でヘンリックを求めていた。

若い狩人は、それまで自分がジレンマに陥っていた事など、もうどうでも良くなった。ここはヤーナム。

信じてきた故郷の神はこの地では救いの手を差し伸べてくれなかった…。

ゆえにその神に対する戒律を畏れ守るよりも、今や狩人の掟による狩人同士の結びつきこそが重要であると理解し、これを選んだ。

俺は覚悟を以ってこの人を選んだのだ。俺はこの人を求めて良い…はず…。

少し迷いがあった。本当にヘンリックが自分を受け入れてくれるのかどうか。

「あツ…あの…ヘンリックさん…」

紅潮した頬に潤む瞳でヘンリックに問いかけた。

「俺は…貴方を、求めても…求めてしまっても、良いのですか…？」

その言葉に古狩人は眉間に皺寄せて、静かに怒った。怒って一つ唇にキスを落すと、「馬鹿かお前は…。お前に求めて欲しいのだよ、俺を…。いまさら言わせるな」

もう一度、少し長い柔らかなキスをした。そして、

「今後俺を呼ぶときは、名前だけを呼べ。普段の時も、…お前とこうする時も…わかつたな…？」

ヘンリツクは少し笑うと、荒波のような狩人の夜に若者を連れて行った。

— END —